

第40回
全日本教職員連盟
教育研究大会（宮崎大会）資料

第1分科会 学習指導 A

我が国と郷土の歴史や伝統・文化への理解を深める学習指導

グローバルな視点とローカルの視点を兼ね備えたグローバルな児童の育成
～人権学習を中心とした見方・考え方を広げる教育実践～

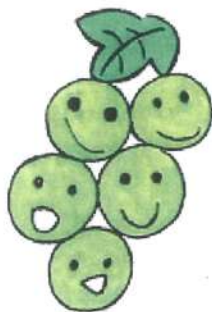


学島小学校



徳島県教職員団体連合会

吉野川市立学島小学校 上岡 真依



I 研究の概要

1 研究主題

グローバルな視点とローカルの視点を兼ね備えたグローバルな児童の育成
～人権学習を中心とした見方・考え方を広げる教育実践～

2 主題設定の理由

(1) 児童の実態

本学級（第3学年 男子13名 女子6名）の児童は、素直で明るく、理科や社会科、外国語活動等の新しい学習に興味をもち、意欲的に取り組んでいる。友達のことがとても好きで、互いに学習や生活の中で助け合いながら前向きに努力する姿が見られる。幼い頃から互いによく知っており、協力し合う反面、「この子はこういう子だから」といった固定観念が強く、それが原因でトラブルになることもあった。また、好きなことについては、熱心に調べたり、実践したりするが、興味関心の低いことについては、知識を深めようとしめない。総合的な学習の時間に、地域について話し合ったときには、ほとんどの児童が地域のことが好きだと回答していた。しかし、具体的に地域のよさを実感し、そのよさを伝えられる児童は少ない。このような児童の実態の背景の一つには、地域の人と十分に交流することができなかったことや、地域を歩く機会が少なく、どんな場所があるのかをあまりよく知らないことが考えられる。また、感染症対策により、様々な人と交流して多様な価値観や考えに触れる機会が少なかったからか、自分の考えと異なる意見を否定してしまう場面もあった。

そこで、自分の考えだけに捉われず、多様な見方や考え方を認め、相手の思いに寄り添うことができるような児童を育成したいと考えた。外国語活動や総合的な学習の時間の始まるこの時期に、多様な見方や考え方のよさを理解した上で、異なる文化に触れ、地域のよさを知る学びへとつなげたい。そして、地域のよさに気づき、そのよさを他者に発信する機会をつくることで、自分たちのふるさとを誇りに思う心情を高めたい。

(2) 地域・学校の実態

本校の校区は田畑が広がり、豊かな自然に恵まれた地域にある。学島川や学駅の周りには町工場や商店があり、交番や郵便局などの公共施設も並んでいる。一方で、少子高齢化による人口減少が進み、駅は無人化され、町工場は他の地域の人や外国人の働き手の占める割合が大きくなっている。また、学校と地域の結びつきも変遷しており、昔からあるぶどうづくりが少子高齢化により継続・実施されにくくなっている。しかし、川島塾によるお祭りや子ども食堂等地域を盛り立てる活動が実施されている現状もある。

(3) これまでの研究

令和3年度は徳島県、令和4年度は文部科学省の指定を受け、人権教育の研究に取り組んできた。本校には、なかまづくりの象徴である「なかまの像」がある。「なかまの像」は昭和48年に創られ、差別に立ち向かうなかまを育てたいという児童や家庭、地域の人々の思いを受け継いできている。「友情」「前進」「希望」「やさしさ」の4つ思いが込められ、その視点を学習の視点とし、全ての教育活動に取り組んだ。

ふるさと教育においても、人権教育の視点からの改善を図りながら、多様な人々との関わりを通して、地域のよさや課題を共に考え、ふるさとに誇りをもつことができる児童の育成に努めている。グローバルな視点をもってふるさとを見つめ、よさや課題を含めてありのままのふるさとを愛し、自分にできることを考え行動できる児童を育成したいと考え、継続した取組を進めている。

3 研究主題・副主題について

(1) 主題「グローバルな視点とローカルの視点を兼ね備えたグローバルな児童の育成」

地域教材（ひと・もの・こと）に触れる中で、多面的に物事を捉えることから、新たな発見や豊かな気づきが生まれる。また、多様な見方や考え方をもちた児童が、対話を通して自分の考えを深め、自分を好きになり、家族を好きになり、地域を好きになる。そして、ふるさとに対する新たな価値を創造し、ふるさとを愛し、誇りをもって社会の中で生きていこうとする意欲を高めたい。

(2) 副主題「～人権学習を中心とした見方・考え方を広げる教育実践～」

3年生の児童は、幼少期から固定化されたメンバーで過ごしてきたこともあり、見方や考え方が広がりにくく、自分と異なる価値観を受け入れにくい様子も見られた。そこで、人権学習を中心に、多様なものの見方・考え方に触れ、互いの違いやよさを認め合うことを通して、自分を大切にし、他者を尊重しようとする態度を養いたい。見方や考え方を広げるためには、自分の考えをもち、主体的に対話を通して学び合う学習に取り組むことが大切である。そこで、児童に身につけさせたい資質・能力として、「共感的に聞く力」「表現豊かに伝える力」「進んで行動する力」を取り上げる。また、本学級には外国にルーツをもつ児童が在籍していることや、地域でも外国の方が地場産業を支えていることを踏まえ、ふるさとのよさに迫るためには、児童に日本人と外国人という分け隔てをすることなく、共に支え合い生きていく仲間であるという心情を育てる必要があると考える。

4 研究の仮説

<グローバルな視点の育成>

異なる文化に属する人々の考えと関わる機会を増やし、教材や人との対話を通してグローバルな視点を養うような授業実践に努めるならば、児童は、自分と異なる価値観を受け入れ、他者を尊重しようとする態度が養われるであろう。

<ローカルな視点の育成>

地域教材（ひと・もの・こと）に積極的に関わり、地域との関わりを深め、ローカルな視点を養うような授業実践に努めるならば、児童は、地域のよさや課題に気づき、ふるさとを大切にしようとする心情が養われるであろう。



<グローバルな児童の育成>

地域とのつながりを深めることで、児童は、ふるさとを多角的・多面的に捉えられるようになり、ふるさとに対する新たな価値を創造し、ふるさとを愛し、誇りをもって社会の中で生きていこうとする意欲が高まるであろう。

5 研究の具体的方策

(1) グローバルな視点を育成するために

- ・教材（書物・映像）との対話や教師との対話を通して、異なる価値観をもった人々の考えと関わる機会を増やし、他者の考えを知ることができるようにする。
- ・ゲストティーチャーを招き、外国の文化（言語・食・祭り・衣服・スポーツなど）に触れる機会を増やし、それぞれの文化の違いに気付くことができるようにする。
- ・ゲストティーチャーに教えてもらったことや、本やICTの活用等、様々な情報収集を通して学んだことを、思考ツールを活用してまとめ、伝え合い、考えを深めることができるようにする。
- ・ゲストティーチャーの考えや生き方から、自分たちのこれからの生活について考えられるようにする。

(2) ローカルな視点を育成するために

- ・様々な地域教材（ひと・もの・こと）との出会いや気付きを大切にし、自分たちの地域について、課題意識をもつことができるようにする。
- ・体験活動や交流活動、本やICTの活用等、様々な情報収集を通して、課題を追求できるようにする。
- ・ペア学習やグループ学習を取り入れ、対話を通して考えを深めることができるようにする。
- ・他の地域と自分たちの地域を比較することにより、共通するよさや課題、自分たちの地域の特質に気付くことができるようにする。
- ・地域のよさと課題を振り返り、自分たちが地域のためにできることは何かを考えることができるようにする。

II 研究の実際

1 地域教材を活用し、地域のよさに触れる活動

(1) 地域給食

給食に使われている食材には吉野川市内で作られた野菜も多く使われている。今日の献立にはどの地域で育てられた食材が使われているのかや、地産地消、郷土料理についての話等、様々なことを給食の放送を通して学んでいる。例えば、委員会の児童から「今日は、『とうもろこし』についてお話しします。徳島県では、吉野川市、阿波市、石井町などで多く栽培されています。今ちょうど食べごろを迎えているのが『甘々娘』^{かんかんむすめ}という種類のとうもろこしです。甘々娘の『かん』は『甘い』という意味で、その名の通り、実の糖度がとても高いです。なんと果物と同じ甘さがあるそうです。黄色と白色の実が付くのも『甘々娘』の特徴です。実の皮は厚めなので、ゆっくりゆでたり蒸したりしてもしゃっきりとした歯触りがあります。今日は、吉野川市産のとうもろこし『甘々娘』を給食に使いました。吉野川市の自慢のとうもろこし、甘くておいしいですね。」という放送が流れると、「ぼくのおじいちゃんも甘々娘を育てているよ。」「本当に甘くて美味しいね。」等、積極的に思ったことを話しながら甘々娘にかぶりついていました。また、吉野川市の名菓である洋菓子店のクッキーや、和菓子店の饅頭などがデザートにつくこともあり、地域でどんな食品が作られているのかも楽しみながら、給食を食べている。



地元の食材がたくさん入っているんだな。

吉野川市で有名なお菓子屋さんから給食用のクッキーが届いたよ!

(2) 学校行事

縦割り班活動の一つとして、地域のチェックポイントを巡る「オリエンテーリング遠足」を行っている。駅や公園、神社、商店等を巡ることで、地域にどんな場所があるのかを知る機会となっている。チェックポイントごとにチームでクリアするべき課題があり、協力することの大切さについて学んできた。また、同時に落ちているごみを拾うなど、ボランティア活動も行い、地域を大切にする心情を養っている。



学島のチェックポイントを回ります。

歩きながら自然を全身で感じます。

また、2月には、校内持久走大会が行われ、低学年・中学年・高学年に分かれて地域を走っている。沿道では、保護者やスクールガードさん等地域の方々に見守られ、励まされながら完走している。日頃お世話になっているスクールガードさんに参加いただき、お手紙を渡すことで、日頃の感謝の気持ちを伝えることができた。



地域の人に励まされながら走り抜きます。

いつも私たちを見守ってくださり、ありがとうございます。
感謝の手紙を受け取ってください。

(3) 放課後活動（獅子舞クラブ）

4～6年生の希望者が獅子舞クラブに在籍し、地域の伝統芸能である獅子舞を受け継いでいる。指導者の高齢化と継承者不足から継続が困難となり、学校に獅子や太鼓を譲渡された。現在はタブレットを活用しながらこれまでの映像資料を活用し、受け継いでいる。3年生児童は獅子舞クラブの発表を見学し、体験会に参加した。長胴太鼓や拍子木の打ち方、獅子の舞い方の基本などを教わり、「リズムよくたたくのが難しかった。」「獅子は思ったよりも動きが難しかった。」と、伝統に親しむ様子が見られた。また、「来年はクラブに参加してみたい。」と伝統を受け継ぐ気持ちが高まる児童もいた。



実際に舞を見たり音色を聞いたりすると迫力があるな。

リズムよくたたいて、
そろそろうれしいな。



思ったより
前が見えなくて難しい。



(4) なかまの像

『なかまの像』は、今から約50年前に、共に考え、支え合う仲間づくりの心よりどころとして、当時の児童会によって創られた。この像には4つの思い「友情・前進・希望・やさしさ（友情を育めば自己肯定感が育つ。集団としての絆が生まれ、団結して前進することができる。やりたいことを見つけ、希望が生まれる。いつも人のつらい気持ちがわかるやさしさをもって。）」が込められている。児童は4つの思いを大切にしながら学習に取り組んでいる。毎年3月には、卒業生の名前がタッセルに刻まれ、在校生に引き継がれている。「ぼくのお父さんの名前があるよ。」「わたしたちの名前がここに書かれるのが楽しみ。」等、学校の伝統を大切にしていこうとする児童が多い。



2 人権学習を中心とした各教科等における見方・考え方を広げる活動

(1) 社会科

校区探検を通して、自分たちの住む地域にはどんな店や公共施設があるのか、土地の使われ方はどうかなどを調べた。学校の西側には特産品であるぶどう畑が広がっていることや、駅を中心に郵便局や交番などの公共施設があること、かつては営業していたが今は閉めてしまっている商店も多いことを知った。また、農産市では、地域で生産された商品がたくさん売られていることや、自分たちの住む校区には神社や公園、消防団がたくさんあることに気が付いた。

さらに、郵便局で働く人へのインタビューを通して、毎日どのくらいの郵便物がきているのか、そして、人口が減っていることやSNS等の普及から郵便物の数が減っていることを知った。また、学駅は自動車を利用する人が減ったことから、無人駅として運営されている現状を学んだ。そして、交番で働く人へのインタビューでは、地域を守る仕事の仕方や事故件数が学の地域では少ないこと、有事に向けて見回りをしっかり行っていることについて知った。自分たちの地域では人口減少の課題を抱える中で、地域を守り支えている人たちがいることについて学んだ。地域には、自分たちが想像していた以上に外国の方が滞在していることを知り、外国の方々がやってくるほどの魅力が学にあるのかと興味をもつ児童もいた。



こんなに重いのを着たまま、
町を守ってくれているんだ



郵便物が減っているのはどうしてですか。

(2) 特別の教科 道徳

絵本「ふたりのサンドウィッチ」を教材として学んだ。普段はとも仲よしの二人が互いの食文化に対する理解のない発言により相手を傷付けてしまう話である。サンドウィッチに込められた文化の違いやそれを作った両親の思い、傷付いた互いの心について話し合い、自分の国とは異なる文化への偏見は相手の心を傷付けることを学んだ。また、異文化にはそれぞれのよさがあることについて話し合い、偏見をもつことなく互いに認め合おうとする態度を養った。児童は学習を通して、「よく知らないことは確かめようと思った。」「他の人の好きな物をよく知らないのに悪く言うてはいけないと思った。」「やってみないとわからないからチャレンジしたい。」等、自分のこれまでの生活と照らし合わせた振り返りができた。





自分のお弁当を見て言われたら悲しいな・・・。

光村図書「ふろしき」の学習では、日本に古くから伝わる文化に関心をもつ主人公の姿を通して、日本に昔から伝わるもののよさについて考えた。実際にふろしきでボールや教科書などを包みながら、「布の形がどんどん変わって、いろいろな物を包めるのがすごい。」「1枚の布でこんなにたくさんの物を包めるなんて知らなかった。」「弟に包み方を教えたい。」等、多様に形を変化させて活用できるふろしきのすばらしさを感じることができた。また、他にも日本で古くから血伝わっている物はないかを話し合ったときには、着物や折り紙、うちわ、和太鼓、獅子舞等が上がった。受け継がれてきた理由やそれぞれのよさを考えることで、日本の文化を大切に受け継いでいこうとする心情が高まった。

光村図書「マサラップ」の学習では、外国から来たリサ先生と積極的に交流する主人公の姿を通して、他国の人となかよくなるために大切なことについて考えた。学習の振り返りでは、「自分がもし外国に行って、誰にも話しかけられなかったら悲しいから、まずはあいさつから始めてみる。」「その国の文化を調べておいて、なかよくなれるようにしたい。」「日本のいいところを伝えたい。」等、互いの文化を大切に、自分の国のよさも伝えていきたいという意見が出た。また、「世界のいしょう」というコラムを通して、他国の民族衣装にも関心をもち、他国の文化や伝統に親しもうとする心情が高まった。

絵本「さやかちゃん」を教材として学んだ。徳島県から転校してきたさやかが、たけしによって徳島県の方言（阿波弁）を笑われ、初めての友達である「ぼく」もたけしの言動を止めることができず、大粒の涙を流す話である。生まれ育った地域の言葉へのからかいは、相手の心を傷付けることを理解させ、どう行動すべきであったかを話し合った。「話し方を悪く言うことは相手を傷付けることを学んだ。」「自分も阿波弁を悪く言われたらいやだから、注意しようと思った。」「話し方は人によってちがうのが当たり前だから、守れるようになりたいと思った。」等、違うことの豊かさを認め合おうとする心情が高まった。



(3) 国語科

国語「じょうほう 引用するとき」の学習では、他教科の学習を通して外国の文化に興味をもっていたこともあり、本で他国の文化について調べる学習を行った。ペアやグループで本を読んだり、書かれている内容を引用してワークシートにまとめたりすることにより、互いに協力しながら、様々な国の食文化や民族衣装、有名なスポーツなどを調べることができた。調べたことを整理し、発表する活動では、思考ツールを活用し、それぞれの文化の違いや共通点を意識しながら、考えや感想を伝え合うことができた。



国が近いと衣装の色も似ているね。

(4) 図画工作科

国際理解学習を進めていく中で、肌の色の違いに対する無意識の差別的な発言が見られたことから、絵本「ごぼうさんの色は…」や肌の色のクレヨンを活用し、肌の色は一人一人違っており、見た目による差別は相手を傷付けることについて学んだ。このお話は、自分の肌は黒くて汚いと言われ悲しむごぼうさんが、「ぼくたちはもともとくろいんだよ。」と訴えることにより、にんじんの赤もだいこんの白もごぼうの黒も、世界中の肌の色はどの色もありのままで美しいことについて考えさせる本である。児童は、肌の色のクレヨンを塗った感じと自分の肌を比べながら、肯定的に受け止めることの大切さについて学んだ。そして、人権ポスターでは、「もし、外国から転校生が来たら…」をテーマに、新しい友だちに学の自然を紹介する自分たちの絵を描いた。



ジョエル・アソグバ作
「ごぼうさんのいろは…」
クイーンズ出版、2004年



3 地域教材を活用し、地域よさを伝え合おうとする活動

＜総合的な学習の時間＞

4月のアンケート調査（地域）では、「自分たちの住む地域は好きですか。」という項目に対して、「好き」「概ね好き」と肯定的な回答をした児童は84%で、学の地域に愛着をもっている児童が多いことが分かった。しかし、「自分たちの住む地域にいいところがあると思う。」の項目に対しては、「あまりそう思わない」「そう思わない」と否定的な回答をした児童が、42%いた。地元の名産であるぶどうが美味しいことや、自然が豊かで生き物がたくさんいるところは、地域としてよいものだと感じているが、飲食店や買い物を楽しめる場所等が少ないことから、「学の地域にはあまりよさを感じない」と発言する児童もいた。そこで、「学のすてきを見つけよう」をテーマに、総合的な学習の学習課題を「地域の魅力」と設定し、「どんな場所があるのか」「どんなものがあるのか」「どんな人がいるのか」等、地域について学ぶことにした。

（1）校区内の農作物

社会科の学習で地域の校区について調べたことを基に、疑問に思ったことやもっと調べたいことを話し合い、計画立てて探求することにした。

校区の西コースを巡るとき、学の名産であるぶどう畑があちらこちらに広がっていることを知った。また、ネギのにおいにあふれる道を通るたびに、「ぶどうだけじゃなくてネギもたくさん植わっているな。」「ぼくの家近所は、ネギやトウモロコシがたくさん植わっているよ。」等、地域の農作物には様々な種類があり、もっと他の農作物も調べてみたいと、意欲をもつことができた。総合的な学習の時間にトウモロコシの収穫体験に行った4年生に、作られたトウモロコシがどこに出荷されているのかや、どれくらい出荷しているのか、育て方の工夫などを聞き取る児童もいた。



また、「毎年、5年生が収穫してくれているぶどうはどんな種類かな。」「私たちも5年生になったらぶどうづくりをするけれど、どんな風に作るのだろうか。」と、毎年食べているぶどうの種類や育て方、他にも育てられている品種はあるのか等に興味をもち、タブレットを活用して調べる様子が見られた。ニューベリーAや藤稔をはじめ、自分たちの想像以上に多様な品種があることを知り、驚いていた。



ぶどう園の方から、ぶどうの育て方を1年かけて教えていただいています。



学校みんなに地元の味をプレゼント

町探検のときに、産直市場で友達の家で作られているハチミツが並んでいたことを覚えていた児童が、後日「隣のスーパーマーケットでもKさんちのハチミツが売られていたよ。」と発言した。その後、他の児童からも「トウモロコシやニンニクにも川島町の名札がついていたよ。」と話があり、身近なところに地域の食材があふれているという気付きがあった。



クラスのKさんのお家で作っているハチミツが売られていたよ。Kさんの写真つきでびっくり!

(2) 校区内にある公共施設や工場等

学駅がいつから「無人駅」になったのかに疑問をもち、駅構内の掲示物やインターネットの情報を基に、学駅の歴史を調べる児童もいた。「学駅の『学』は、学問所が近くにあったからついた名前なんだな。」「合格祈願の学駅入学切符とお守りはぼくの兄ちゃんも持っていたよ。」「1月に駅員さんが来て入学セットを売っているみたいだよ。」

「他の地域から買いに来るくらい人気なんだ。」「そういえばニュースで見たな。」など、グループ学習を行うことで、普段は意識していなかった気付きが結びついていく様子が見られた。また、「車で出かけることが多いけど、汽車にも乗ってみたいです。」と、発表する児童もいた。



神社や消防団が校区を囲むように複数あることから、「いったいいくつあるんだろう。」と、疑問をもって調べる児童もいた。タブレットを活用したり、自分の家の近くで気付いたことや、休日に車で通って知ったことを地図に書き込んだりしていた。また、家族が消防団に所属していることから、休日訓練に参加し、どんなことをしたのか日記に書いて発表する児童もいた。



ぼくのパパは消防団に入っているよ。
訓練で消火活動しているのを見たよ。

さらに、北コースには様々な工場があり、たくさんの人たちが働いていることに気付いた。工場のフェンスに、「学島小学校のみなさん 入学おめでとうございます」の文字を見つけ、「毎年こんなことしてくれていたんだ。」と喜ぶ様子が見られた。また、地域を歩くうちに、想像以上に外国の人たちが働いていることを知った。

(3) 吉野川市に住む外国人

他の地域から吉野川市に移り住んでいる外国人に興味を抱き、インタビューする中で、都会ではなく、なぜ学級の地域に外国の人たちが住んでいるのか気になるという意見が出た。そこで、まず児童にとって身近であるアメリカ出身の2人のALTの先生に、どうして日本に来たのかや自国の文化のよさや日本との違い等について話を聞く機会を設けた。自分たちの国の食べ物や話し方、遊び、伝統の祭りなどを比較しながら聞き、異文化を理解しようとする心情を養うことができた。また、同じアメリカでも地域によって違いがあることに気付いた。



アメリカンクラフトに挑戦!



え〜!豚の内臓や耳を食べたりするんだ!おいしいのかな?

また、外国にルーツをもつ児童の保護者や吉野川市国際交流協会の協力により、中華人民共和国やインドネシア共和国についても学ぶことができた。実際に教えてもらったその国の言葉を使って交流したり、生き物や食べ物、祭り等の写真や動画を見たりすることによって、異国の文化に親しむことができた。さらに、自分たちの住む地域では、外国産の商品を売る商店があることや、キャッサバ芋が育てられていることを初めて知った。「地域に外国の方が住んでいるから、ふるさとの味を日本でも味わうためではないかな。」と想像する児童もいた。キャッサバ芋はタピオカの原料であり、タピオカドリンクの流行に合わせて生産が増えていることも教えてもらった。

質問があります!
中国のいいところと日本のいいところは何ですか?



どうして中国から日本に来たんですか?



キャッサバ芋はぼくたちの住む地域でも育てられているのか!知らなかったな。



今まで食べたことのない味や食感だな。

学島小学校のすぐ近くにある縫製工場では、本校をはじめ、全国の学校の体操服や作業服等を製作している。コロナ禍が始まった年から、消毒作業用に、衣服を作る過程で余った布を無償で提供してくださっており、給食前の台ふきや机の消毒等に使用している。児童は、社会科で工場見学をする時に、服の製造工程と共に、中国やベトナム、ミャンマー等から働きに来た外国の人がたくさん働いていることに興味を持っていた。技能実習生として、外国から働きにきている人がいること、日本でお金を稼いで自国の家族に送金している人がいることを知った。



わたしたちの夏用体操服
を作っているんだ！



たくさんの外国の人が働いているんだな。



服を作るときに余った布
をもらって、机の消毒をし
ています！



いつも台ふき用の布をくださって、
ありがとうございます。

(4) 地域カルタ

1年間の学びを通して、地域の魅力について話し合った。その魅力を伝えたい相手を話し合ったときには、家族や低学年児童、地域の方々等の意見が出され、保護者や地域の方には参観授業を通して、低学年児童には手作りカルタを作って伝えることとした。ポスター発表や地域クイズづくり、カルタの制作を通して、自分たちの地域の魅力について、自分なりの言葉で表現することができた。



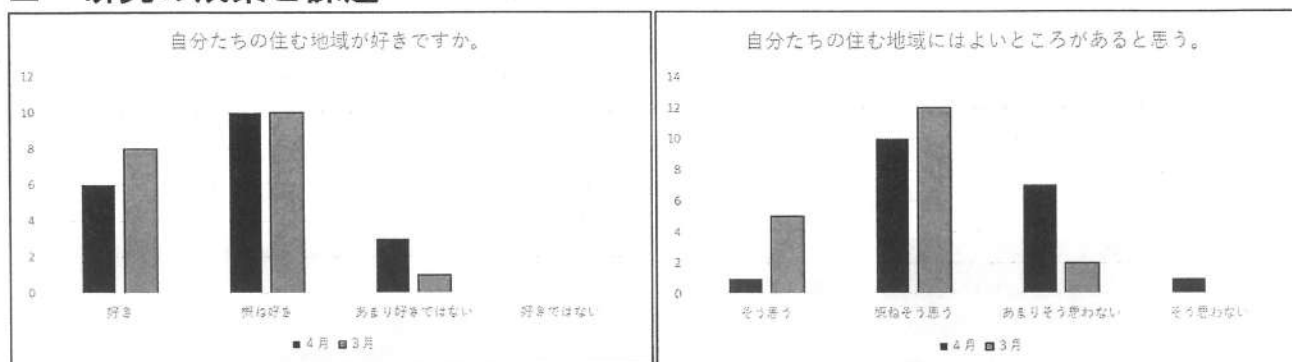
地域のいいところカルタ

最後まで聞かないと、どの絵札か
わからないよ！しっかり聞いてね！



外国の方から
教えてもらったことカルタ

Ⅲ 研究の成果と課題



<成果>

グローバルな視点の育成について、教材や教師、友達との対話を通して、「人はみんな考えがちがって当たり前。」「相手の気持ちを大切にしようと思った。」等、自分と異なる価値観を受け入れ、尊重しようとする児童が増え、成果が見られた。また、ゲストティーチャーとの交流により、様々な文化の共通点や相違点に気付き、「日本と似ているところがたくさんあってびっくりした。もっと他の国のことが知りたい。」「インドネシアの袋に入れて競争する遊びを実際にやってみたい。日本の遊びも教えてあげたい。」等、積極的に他の国と関わろうとする児童が増えた。

ローカルな視点の育成について、アンケート調査（地域）の4月と3月の結果を比較すると、「自分たちの住む地域が好きですか。」という項目に対し、肯定的な回答が11%上昇し（84%→95%）、「自分たちの住む地域にはよいところがあると思う。」という項目に対し、肯定的な回答が37%上昇しており（52%→89%）、成果が見られた。「ぶどうだけじゃなくて、トウモロコシやネギ等様々なものが育てられているのを知ることができた。」「学駅には入学切符やお守り、入学米など、地名にちなんだものがあるのを初めて知った。」等、地域には自然やぶどうだけでない魅力があることを知り、具体的に地域のよさを話すことができる児童が増えた。

グローバルな児童の育成に努めた結果、児童は、ふるさとのよさとともに、少子高齢化による人口減少や駅の利用者の減少、商店が閉店する等、地域には多くの課題があることを知った。一方で、地域を守り支え、地域を活性化させようとしている存在に気付くことができた。和菓子店やブドウセンターがインターネットを活用して新しい販売先を増やしていることや、川島未来塾開催のお祭りやこども食堂活動を知り、自分たちも地域の活動に参加しようとする心情が高まった。

<課題>

ふるさとに誇りをもち、そのよさを伝えようとする心情を高めることについては、十分ではなかったと思う。例えば、お世話になったゲストティーチャーに自分たちの学びを伝えることや、近隣校である川島小学校や山瀬小学校の3年生とICTを活用して交流を図る等、様々なツールを活用しながら、自分たちのふるさとのよさを表現し、発信する機会を設けることで、ふるさとに誇りをもち、社会の中で生きていこうとする意欲を高めたかった。また、地域の課題に対して、自分にできることを考えて行動しようとする態度の育成についても、課題が残った。

今後は、総合的な学習の時間や特別活動も充実させながら、自分たちにできることについて考え、社会の一員として地域のために行動する力を養っていきたい。

